

第1回農業考古国際学術会議に参加して

森本和男

中国農業史の研究は、文革終結後新たな高揚をむかえた。専門雑誌もいくつか創刊され、農業史の様々な分野で研究が進展している。その背景には、伝統的な技術や文化を現代に活かし、農業生産の増強を意図しているようである。中国農業の起源についても、中国新石器文化の内容が次々に塗りかえられるなかで、新たな角度から検討され始めている。このように農業史研究が活発化するなかで、農耕の起源、農業史、農具についての国際会議が中国江西省で開かれた。会期は8月20日から30日までの10日間である。この会議を立案し組織した人は、江西省社会科学院の陳文華教授である。彼は1981年に『農業考古』という雑誌を創刊し、原始古代の農業について、考古学的な側面からの研究に力を注いできた。また、中国の農業だけでなく、世界的な視野からも原始古代の農業を取り上げてきた人である。今回の会議は、『農業考古』創刊10周年記念もかねて企画されたようである。

会議の参加者は、中国人約130名、外国人(香港、台湾を含む)約20名であった。当初の予想では、中国人学者は100人に満たず、逆に外国人はもっと多く参加するであろうと思われていた。日本人参加者は、九州大学名誉教授の国分直一先生と梅光女学院大学の劉茂源先生、大阪経済法科大学の村川行弘先生、愛媛大学の間瀬収芳先生、筑波大学の山田昌久先生、野文化研究所の森田勇三先生、現在北京大学に留学中の愛媛大学の宮本一夫氏と九州大学の渡辺芳郎氏、そして、私の計9人であった。アメリカからは Olsen, S. J. と MacNeish, R. S. がきていた。Olsen 教授は動物考古学が専門で、動物の家畜化をおもに研究している。MacNeish教授は、アメリカの初期農業に関する大家である。中国人学者では、中国科学院遺傳研究所の李璠教授、南京大学の張之恒助教等の顔が見うけられた。一般に中国人学者は華中以北の人がほとんどで、どういうわけか華南からの参加者はい

なかった。

会議は、まず四つの分科会にわかれて討議をおこない、そして、各分科会で重要と思われた論文を全体会議で発表するという形をとった。四つの分科会とは「農耕の起源」、「稲作の起源」、「家畜動物・農業工具」、「総合性」であった。私は第1の分科会に属し、中国初期農業について、後期旧石器から新石器初頭にかけての遺跡分布状態の相違、環境・生業の変化等を論じた。大動物の狩猟活動から、多種多様な動植物を対象とする栽培、採集、狩猟、漁労活動が盛んになった。動植物が豊かに繁殖する大平原の一部から農業が発達したというのが私の論点である。全体会議で発表した際、なぜ農業が平原から生まれたのか、なぜ多種多様な動植物を食べるようになったのか、という点に質問が集中した。いずれも今後の研究課題となるであろう。他の分科会にも顔を出したかったが、不可能であった。

会期中に、中国農業史に関する展覧会が催されていた。原始的農業から近代的農業までの発展経路を、パネルと模型で展示してあった。詳しい説明が併記されていたため、制作にかなりの時間を要したと思われる。原始的農業については、磁山・裴李崗文化の磨盤(石皿)・磨棒、河姆渡文化の骨耜のレプリカ、石鏟、各種の出土穀物等を見ることができた。一般に中国では出土資料を実見できる機会が少ないため、今回の展覧会は有意義なものであった。また、約9000年前の稲が出土したと言われている湖南省彭頭山遺跡の土器を、調査者が持参し公開していたため話題をよんでいた。その他、中国農業史に関する様々な出版物も販売されていた。

会議終了後、江西省博物館、および開催地周辺に位置する廬山、景德鎮を見学した。江西省博物館では、わずかであったが、万年鼎仙人洞遺跡の出土遺物を見るのができた。この遺跡は、きわめて古い土器が出土したことから、新石器時代初

頭の洞窟遺跡として中国内外で有名な遺跡である。展示されていた土器は小片ばかりで、しかも10点にも満たず、出土層位も明記されていなかった。土器以外にも多数の石器、骨角器が出土しているはずであるが、残念ながら展示していなかった。廬山は風光明媚な避暑地として古来から有名な山地である。陶淵明、李白等の著名な文人が、酒を嗜みつつこの山を逍遙していた。李白の詩で有名な「香炉峰」はここにある。戦前には南京政府の避暑地として、蒋介石をはじめ政府要人の別荘が数多く建てられた。解放後毛沢東もこの地を好み、しばしば訪れたという。景德鎮は言わずと知れた陶磁器の町である。この町は輸出用の官窯として、宋代から清代にかけて世界的にその名が知れわたった。民国時代に一時衰えたが、解放後再び陶磁器生産の中心地となった。陶磁器に関する博物館、古窯の陳列館、昔ながらの制作工房等、各種の展示施設がととのっており、それらの施設を見学するだけでも大変良い勉強となった。

会議の感想をすこし述べておきたい。この会議のテーマが基本的に農業史であったため、考古学や歴史の専門家だけでなく、農学者も多数参加していた。考古学者と農学者との間には、ある種の意見の隔たりが感じられた。意見の隔たりとは学問的な方法論にも関連している。植物地理的、遺伝的な研究結果から、農業の発生は一万年以上も前にさかのぼると農学者が考えているのに対し、考古学者は実証的な立場から農学者ほど古く考えていない。旧石器遺跡から農業を物語る動植物遺存体や農耕具が出土しないため、考古学的には農耕の起源を古くできないのである。考古学者の間にも若干意見の相違が見うけられた。これも方法論的な問題にかかわるのであるが、古い世代の考古学者が土器や石器などの考古学的資料を重視するのに対し、若い世代の学者は環境や生業に研究の重点を置いている。欧米考古学との対比という観点からすると、先史時代の環境や生業に注意を向けるという姿勢は重要であろう。

初期農業の研究は世界各地でおこなわれているが、主として欧米考古学の方法論にもとづいて行

われている。中国の初期農業とその他の地域の初期農業とを比較する場合には、統一した方法論がある程度必要である。しかしながら、中国考古学者の間では、欧米考古学の方法論はさほど理解されていない。また逆に、欧米では中国の資料が知られていない。両者の間に横たわるギャップのため、中国初期農業の特異性が正しく認識されていないのである。このギャップをどのように埋めていくかが大きな課題となるであろう。



開会式



陳文華教授と